

## 1 問題設定；質的調査(QR)として通称・山村調査を再定位する

演者が本プレゼンのテーマとして依頼されたのは、柳田國男を中心とする“郷土生活研究所”が日本学術振興会より1934年度から三年間助成を受けた、**通称・山村調査**（正式名称：日本僻陬諸村における郷党生活の資料蒐集調査）、という一点のみ。同調査に関する先行研究としては、成城大学民俗学研究所による同じ調査地を対象とした追跡調査などが知られている【→同研究所[1986][1987][1988][1990]】。

そこで本プレゼンでは、こうした既存の研究とは袂を分かち意味でも、異なるアプローチを試みたいと思う。

具体的には、社会調査分野における質的調査（qualitative research; QR）、別の表現では質的データ分析（qualitative data analysis; QDA）において近年脚光を浴びている（提唱は1960年代だが...）、**グラウンデッド・セオリー**（grounded theory; GT）において提起されているQR/QDAに関する諸問題を参照しながら、山村調査を位置づけてみたい。

GTについては次節で概観するが、提唱者である二人の社会学者について、あらかじめ見ておく。片方のBarney G.Glazerはコロンビア大でラザースフェルドやマートンに学んだというように元々は量的な調査をしていた人。相方のAnselm L.Straussが二人を有名にした病院での医療・看護調査をメインでやっていた人で、ブルーマーの流れ（シンボリック・インタラクショニズム; SI）の社会学者であるが、学位はQRの聖地シカゴ大。

つまり、グラウンデッド・セオリーは、量的な調査とQR/QDAとの相剋の所産ということに....【→Glazer, B.G and A.L.Strauss[1967/1996], pp.i-iii】なお、両者は後に対立？

## 2 グラウンデッド・セオリー (GT) から見た質的調査と理論

GTについて、演者は邦訳のある三書を取りあえず参照した。終末期医療を行う病院での看護専門職への参与調査による、1965年の『死にゆく時の意識』(Awareness of Dying)、質的調査からの理論産出そのものを課題とした1967年の『グラウンデッド・セオリーの発見』(The Discovery of Grounded Theory)、およびストラウス主体の著作でやや啓蒙的な『質的調査の基礎』(Basics of Qualitative Research)の第2版、である。この三書とも、後掲の文献リストに見られるように、それぞれ元のタイトルから離れた邦訳題となっている。

『死にゆく時の意識』は『GTの発見』以外にも後に様々なQR本で“GTの出発点”的な位置づけをされるが、GTの“売り”の一が生のインタビュー・データからコードを抽出し、そこから理論を産出する、という手順であるとすれば、その生データがかなり稀少であるので（同書は、あくまで終末医療研究）、GT特有の手順をフォローするのが難しい。

『質的調査の基礎』は、逆に数多くのインタビュー・データが紹介され、コード化の手順としてオープン・コード化(open coding\*)→軸足コード化(axial coding)→選択的コード化(selective coding)という三段階が設定されるが、この点は『GTの発見』と異なるものである（←後者では、オープン・コード化と選択的コード化のみ）。

\*《オープン・コーディングの例》Q:ドラッグは簡単に手に入るの？ A:どこでも簡単に手に入るわ（→簡単なアクセス）。彼らにただ話しかければいいのよ（→ネットワーキング）。パーティーにいけば、そこいらじゅうにあるわ。学校でも手に入れられるわよ。彼らに頼めば問題なく直接届くわ（→面倒見のいい供給ネットワーク）。【Strauss and Corbin[1990/2004],p.135】

もっとも、ストラウスらがこうしたコーディングの手順を如何に精緻化させ、それに沿って、如何に彼らのいう“フォーマル理論”\*（領域に密着したsubstantive theoryの対語）に到達したかは、差し当たって通称・山村調査を巡る我々の関心外であろう。

\*《フォーマル理論の例》ある個人の社会的価値が高くなればなるほど、個人が専門家から受けるサービスを受ける際に待たされる経験は、それだけ少なくなる。【Glazer and Strauss [1967/1996], p.58】

そこで、ここでは1967年の『GTの発見』の第6章「比較検討事例の検討と評価」において、既存の社会学や人類学の事例研究に理論を検証する方向性と新たに理論を産出する（つまり、GTが目指すような）方向性を数例ずつ選び出している箇所のみ参照したい。

後者については、とくにストラウスのSI的な流れから親和的と推察されるゴフマンやT.シブタニらの他、エヴァンズ=プリッチャードやギアーツらの人類学的研究があげられている。しかし、山村調査に関連してより注目すべきは、前者と後者との中間的な“理論検証を前提にした上で、これに理論産出を部分的に加えた事例”の一として、1941年のレッドフィールド『ユカタンの民俗文化』が例示されていること。

グレイザーらによれば、レッドフィールドがこの事例研究で四つの地域社会（<sup>メリダ</sup>市、<sup>ジタス</sup>町、<sup>チヤンコム</sup>村落、<sup>トウシク</sup>部族社会）を事例に選んだのは、モーガン、テンニース、デュルケムらの理論を検証するという目的に沿ったものであったが--それが、調査に先立って仮定された都鄙連続体説--、結論部分では新しい理論も産出しているのではないか（例；長期間孤立した同質性の高い社会は全て、宗教的で集合主義的であり、また巧みに組織された文化によって特徴づけられているかどうか？）、としている。【Glazer and Strauss[1967/1996], pp.179-183】

→この着想を踏まえて、通称・山村調査における理論検証と理論産出のバランス、また後者が多少でも存在したとすれば、それは一体何だったのか？、へと考察を進めたい。

### 3 通称・山村調査の概略：調査手法、調査項目、報告書の形態など

《調査手法》1934年度より三年間\*日本学術振興会から助成金を得て、各県一箇村以上を目安に述べ52村（初年度21村、二年度目15村、三年度目16村）を調査対象村としたもの。柳田自身は、「村が一個の有機体として、命長く生きて来た生理を明かにしやう」という課題に基づく調査であるとして、調査地の選定については、「二以上の異なる府県でも、あまり近接して居るものは事前の共通が予想せられ、比較の価値が或は低いかとも思ったので、努めて連絡の少ない山間地帯の、やや孤立した村落を物色した」と、初年度報告書（後述）に所収の「採集事業の一面期」に記している。《\*因みに、エンブリー夫妻の須恵村調査や肥後和男の近江の宮座調査と、全く同時代!》

その調査者としては、柳田はどの村へも行っておらず（異説あり；→松本三喜夫[1996], p.143）、成城の柳田邸で始まった木曜会メンバーだった30歳前後の若手研究者十数名が、実施に携わった。概ね単年度に一村に対し一人が割り当てられ（単年度に一人が複数村担当した場合と、同一村に複数の調査者の場合もあったらしいが）、単年度においては共通の100項目の調査票（『採集手帖』）を使って、平均20日ほど滞在した、とされる。

《調査項目》この100からなる調査項目は、前半約3分の1はほぼ変化ないが、同族・祭祀組織・相続などに関する中間～後半にかけて、とくに第二年度以降かなり変化している。この点については、福田アジオによる『山村海村民俗の研究』（後述）「解説」に詳しい。

『採集手帖』の100項目は、各々質問文の形をとっているが--例えば、最終年度の第1は“村（部落）の起こりについて何か言ひ傳へがありますか”となっていて、三項目ほど附則がある--、以下にはこの1936年度の“索引”のみ掲げておく。

- 1 村の起こり
- 2 村の功労者
- 3 村の大事件
- 4 暮しよかつた時
- 5 家の盛衰
- 6 新しい職業
- 7 焼畑作り
- 8 山小屋の作法
- 9 外から買ふ物
- 10 買物に出る場所
- 11 物売り
- 12 物売り以外の来り人
- 13 明治以後の土着者
- 14 出稼地
- 15 外で成功した人
- 16 永く外にゐて帰つた人
- 17 村の自治組織の今と昔
- 18 講、組合
- 19 女の講
- 20 「ユヒ」「モヤヒ」
- 21 「テツダヒ」「コーロク」
- 22 大災難の時の援助
- 23 共有の山河の利用法
- 24 共有財産
- 25 猟の獲物の分配
- 26 村のつきあひ
- 27 村ハチブ
- 28 村の公と私
- 29 村の階級、家の格式
- 30 家じるし、山じるし
- 31 財産の継承、分配法
- 32 仮の親子関係
- 33 同族結合の様式
- 34 同族、親類の義理
- 35 義理固い家
- 36 変人、奇人
- 37 笑ひ
- 38

褒められる男女 39 若者組 40 小供組 41 産屋の行事 42 氏子入り 43  
 娘仲間 44 夜なべ仕事 45 女の仕事 46 遠方結婚 47 仲の良い村、悪い村  
 48 他村からの手伝 49 日雇、奉行人、名子 50 奉行人の居易い家 51 食物の  
 良し悪し 52 特殊食物を造る日 53 酒宴をする日 54 村寄り合いの席、費用 55  
 分配する食物 56 土産の贈答 57 晴着を着る日 58 仕事着の種類 59 イロ  
 リの座席 60 デイを使ふ場合 61 門松、年木 62 花嫁の入口 63 棺の出口  
 64 忌中の行事 65 佛を迎へる入口 66 佛を迎へに行く処 67 年回の終り 68  
 先祖祭り 69 同族神 70 屋敷神 71 植物の忌み 72 氏神のきらふもの  
 73 人が忌み、慎しむこと一般 74 祭礼の全村の慎み 75 頭屋、神役の慎み 76  
 神田及びその世話をする家 77 庄屋、旧家と神社 78 宮座 79 氏神参りに帰村  
 80 山の神 81 神に祀られた人 82 信心深い若い人 83 土地で信心される神  
 84 よくない場所 85 不入山、クセ山 86 神の祟り、不信心者の罰 87 神佛の助  
 け 88 怖い響き 89 狐狸の怪、変化物 90 変化を避ける手段 91 シラセ、夢の  
 告げ 92 ウラナヒ 93 治病の祈祷 94 氏神に何と云つて拝むか 95 雨乞、風  
 祭 96 張切り、道切り 97 通り神 98 疲労、衰弱 99 長生の家筋 100 仕  
 合せのよい家柄

### 《報告書の形式》

日本学術振興会への報告書は、第一・二年度の報告書が各々1935年と36年の3月に提出されており、とくに初年度は謄写版のものであったという。いずれも市販されておらず、名著出版から1984年に刊行された『山村海村民俗の研究』に収録の形により、初めて公開された。第三年度の報告書は、三箇年分のデータをまとめて1937年に『山村生活の研究』として刊行され、翌年に再版された分が1975年国書刊行会より復刊されている。

第一・二年度の報告書（『山村海村民俗の研究』に活字化分）の体裁は、100項目関連のテーマのうち個々の報告者（木曜会メンバー）が興味のある一項目、あるいは関連する複数項目を統合して選び、自分の調査村以外のデータ（単年度では計10数村から20村位になる）をも利用して分担執筆したものとなっている。二年度目の大間知篤三による「両墓制の資料」や関敬吾「宮座に就いて」における両墓制や宮座のように、その年度での100項目に入っていなかったテーマの報告もあり（うち、「宮座」は三年度目の項目に入った）、福田氏上掲稿の指摘のように、ある年度の調査を通じて新たに問題が発見され、それが翌年の調査項目にフィードバックされた場合もあった。論者によっては、多少論考的な傾きの報告もある。

それに対して最終報告書である『山村生活の研究』は、100項目を統合した計65の項目についての一種のデータ集的なもので、個々の報告が短いため論考的な方向性は少ない。

いずれにしても、三通りの報告書は項目（テーマ）主義的な形式でまとめられているため、各々のケース（山村）毎の100項目の生の調査データ\*は、結局オープンにされなかったことになる。《cf.『死にゆく時の意識』で生のインタビュー・データがほとんど収録されなかったことと対応するか?》  
 [\*成城大学民俗学研究所に、データは残っている]

### 4 通称・山村調査における調査前“理論”と考えられるものとその“検証”？

次に、以上の100項目に見られる“理論”と考えられるものを推定してみたい。

《村の社会構造をどう捉えるか》血縁的な関係を中心としてそれを把握しようとしているのでは？；→ 33「同族結合の様式」、34「同族、親類の義理」、68「先祖祭り」、69「同族神」、70「屋敷神」などの関連項目がそれに相当する。これ以外にも、村落組織に関する質問項目はあるものの-- 20「ユヒ、モヤヒ」、26「村のつきあひ」、27「村ハチブ」、29「村の階級、家の格式」等々--、血縁的な方向性で村組織の一端を捉えるベクトルが強いのでは？

《信仰や宗教に関わる集団》これについて特徴的なのは、神社や神祭りの祭祀組織に関わる、いわゆる宮座や当屋制（柳田グループは、必ず“頭屋”の語を使用するが...）に関する調査項目。それらは、75「頭屋、神役の慎み」から、76「神田及びその世話をする家」、77「庄屋、

旧家と神社」を経て、78「宮座」まで。見られるように、氏子衆が祭りの神役を輪番で交替する組織、のような肥後和男らのアプローチとは全く対照的で、祭りの神役を担うのが特定の家筋であり、そうした血縁的な集団（一門）が村氏神の司祭役であった、という調査者側の思惑がここから透けて見えるのでは？（←78の附則に、“一族、一党、或は組、その他の集団が一定の席を取ると云ふ様な慣習はありませんか”、とあることなど参照）

《神と仏》そのこととも多少関連するが、柳田が『郷土生活の研究法』において研究対象の第三分野として提唱した「心意現象」に関する項目としては、いわゆる神観念に関するものが主体であり、仏教に関するそれがほとんど排除されていることも注目される。先にあげた68から70までの同族関係の諸神の他、80「山の神」、72、79、94など氏神関係の項目、また86以降の神に関わる禁忌や託宣関係の項目がそれに相当する。

対して、本来僧や寺院が関与する筈の葬式や年忌供養、盆行事などに関する項目としては、63「棺の出口」から、64「忌中の行事」、65「仏を迎へる入口」、66「仏を迎へに行く処」を経て、67「年回の終り」までであるが、その次の69が先にも言及した「先祖祭り」であるように、仏と称されるような家の死者の霊の送迎に関わる問題に限定されてしまっている。

その結果、僧や寺院への興味は捨象されており、当然100項目の中に村の寺檀関係や宗派分布の質問は存在しない！[←仏教や僧の関与は後世的、という理論負荷の賜か？]

《その他の欠落項目と全体の傾向》他に、よく非難される点として（早い例では、当事者の一人・大間知[1960]など）、この100項目にはデモグラフィック・データに関わる質問が存在しない。もちろん、これは同時代にエンブリー夫妻が熊本県で行っていたインテンシブな村落調査【→J.Embree[1939/1955]】との違い、ということもあるかもしれないが...

以上のようにこれら100項目は、1940年代の柳田の祖霊神学、つまり一村一氏神的な村における祖霊の送迎に関わる理論、を予見するものとも考えられ、質問項目の設定自体にそうした“理論”が隠されていた、と捉えておきたい。→（重出立証法は帰納的、と言いつつ？）ここに到達するために全国調査が試みられたのではないだろうか？

《理論の検証について》先に“論考的な傾きを持つ”とした第1、2年度の報告書のうち、こうした“理論”を検証しようとしたと考えられる代表例二例を概観したい。

◎最上<sup>たかみ</sup>孝敬（初年度）「同族団体について」....「同族団体とは本家別家の一団をさす」とし、「この種同族団体の最も広く用ひられる呼称はマキであらう」としている（53頁）。ただ、この議論は“同族団体”という分析概念と“マキ”なるフォークタームとを無理に結びつけており、有効な議論かは疑問が残る。

その他、ヂルイ、カマド、カブ...など数多くのフォークタームを列挙しているが、地域的に分類しようとする志向は皆無。これらの差異に注目することもほとんどなく、漠然と日本全体(?)の単線的な進化を想定していると思われる。例えば、「同族団体の変質乃至発展の阻止」（59頁）というまとめ方など。さらに、「同族団体の機能」として氏神祭祀に注目し、部落神の「本来の」姿を氏神とするなど（60頁）。

ともあれ最上のこうした言説は、山村調査における同族団の理解の方向性となってゆくのではないか？ → 第三年度の第33項目が「一族、一党を意味する言葉（例へば、イツケ、マキ、アイヂ、カブ）等がありますか」とされており、附則にも「その様な同族をあらはす言葉で親類にも種類が区別出来ればして下さい」「昔の親類と近頃の親類とは性質範囲に差異がないか観察する」「本家、分家を一括する血筋の同じ一党と、夫婦の父方、母方両方の最も近い縁類を中心とする一団とは、明かに区別されるか」とある。

← つまり、調査者が、例えば“あなた（被調査者）の含まれるマキに、他にどの人どどの人がいるか？”を確かめることは、全く期待されていなかった！（本家、分家、など“家”の範囲が絶対で、そこに含まれる個人は関心の埒外だった？；←むしろ、人類学からの親族研究では、上のように個人に焦点を置いて聞き取るのが普通ではないだろうか？）

◎大間知篤三（第二年度）「両墓制の資料」.....民俗学界では、“両墓制”という用語を確定したものとして知られるもので【→福田[1984],p.23】、「『葬地』と『祭地』とは別にする例、即ち墓地に第一次と第二次との二種を有する例」（72頁）としてこの用語を導こうとしている（それも、“第〇次”について明確に定義している訳ではないのだが...）。

山村調査における自らの調査地であった茨城県高岡村の他、東京府檜原村および静岡県気多村、さらに後の柳田のように郡誌類なども参照して、“第一墓地”と”第二墓地”がうかがえるケースを抽出している。

しかるに、先の引用文の前の部分と後の部分とは、“即ち”という接続詞でイコールとされるほど等しいものではない。「葬地」と「祭地」という両用語は柳田「葬制の沿革について」（1929）で提唱されたものであるが、本土におけるそれが改葬を伴わないものであるなら、二種の墓地と同一視するのはきわめて問題ではないだろうか？つまり、「祭地」の方を「第二次」の墓地と位置づけるのは、屋敷地の近くに石塔のみを建てる本土側の習俗を南島の改葬の残存と見なそうとする理論負荷の所産であり、決して妥当な用語法とは見なせないだろう；[-この時点で、大間知はエルツの二重埋葬論を読んでいたのだろうか？]

大間知（1900—70）は、富山県出身で金沢の第四高等学校を経て東京帝大新入会に入り、後に転向した。その後、木曜会メンバーとして山村・海村調査に参加し、さらに後、軍隊時代の上官であった**辻政信**のはからいにより、辻自身が設立に携わった国策大学である満州建国大に招かれ、後にドイツ語・民族学担当の教授になっている。敗戦による引き揚げの後、自らの結核などが因で柳田と決裂したとされることから、高く評価する見方もあるが【→例えば、鶴見太郎[1998]】、上記稿に関しては分析概念の扱いに甚だ疑問を感ずる。

→ こうした最上と大間知の言説は、エトノス／ネイションにおける、いわばジェノタイプに至ろうとするための過度な一般化と考えられ、そのような両者の意向は、柳田がここでいう“調査前理論”を検証するものとして通称・山村調査に期待していた点と対応するものであったのでは？

## 5 通称・山村調査に（GT 的でなくても...）理論産出は存在したか？ +まとめ

GT とはやや異なるものの（おそらく、コーディングの繰り返しによって産出した理論ではない、という意味で...）、上記した最上・大間知らと異なる方向性の言説が散見する。

◎ 杉浦健一（初年度）「『山の神』信仰」.....論考というより、各地のデータを列挙しただけの稿に見えるが、ただ一点、神祭りの日付について「関東から東北にかけて」毎月の十七日の祭日が多い、といった地域的な特徴の指摘があるのが注目される（66頁）。

杉浦は第二年度の「家屋敷の出入口」においても、「関東、東北でも...」（32頁）と、中範囲の地域的広がり注目する議論が若干見られる。

◎ 倉田一郎（初年度）「山村社会に於ける異常人物の考察」.....「資料への民間伝承学の方法--主として帰納的な重出立証法--に於て考究を加へたい」（32頁）としながらも、列挙したデータを最終的に比較考証して全国の特徴を導くのではなく、むしろ地域的な分布図を作るというその反対の方向性を見せている。

◎ 山口貞夫（第2年度）「山村民家に関する二三の問題」.....この年度の報告書には珍しく、データの地域的差異に関する控え目な指摘が見られる（50頁）。

◎ 守随一（最終報告書）「部落と講」.....報恩講が真宗の盛んな地域、大師講が四国から九州にかけて、それぞれ分布することが指摘されている（国書刊行会版、pp.86-92）。

### 《まとめ》

通称・山村調査は、日本全体としての古形（いわばジェノタイプ）を各地方から得られた多ケース（対して、フェノタイプ）から探ろうという志向性を前提にしたものと考えられる。その背後にあったと考えられる、血縁的な社会関係（同族など）に依拠する祖先崇拝、といった柳田の“理論”を検証しようとする報告として最上孝敬や大間知篤三が論陣を張ったと考えられるが、それらは現時点から見ればフォークタムや分析概念の扱いに疑義が残り、

いずれも説得的な言説ではなかった。

→ このことが、最終報告書に収録された柳田の「山立と山臥」冒頭の一文における、「我々の失望を留めて置かう」の因だったのでは？

一方でこの総合調査の調査データからは、サブテーマ毎の地域的偏差の発見、という側面もあった。全てを“学祖”柳田に帰そうとするなら、それが彼の1930年代に始まる方言研究に起源を有すると見ることも可能かもしれないが（周圏論）、上に見たようにことばの問題は見いだされた地域的偏差に含まれていなかった。

何より重要なことは、そうした地域的偏差が、上記のような志向性が期待していたと考えられる民俗変化の地方毎の不均質さ、とは何の関係もなかったことであった。

つまり、通称・山村調査は、柳田が当該調査に期待した“理論”とは明らかに異なる、別次元の“理論”産出の可能性を有していたのでは？；→ しかし、誰もそのことに気づかなかった\*、ということでは？

[\* ただし、演者は（柳田）民俗学が講壇の学としてより、むしろ高度成長期に市町村合併に伴う市町村史民俗編がブーム化するに対応するかのようには市民権を得たのは、こうした学術的営為の利点に一種の分布論があったからでは？、と想像しているのだが.....]

---

#### 《参照文献リスト；初年度～最終報告書の個別論考で上に参照したものは省略する》

- Embree, J.F., 1939(1955) 植村元覚訳 『日本の村落社会—須恵村—』 関書院  
福田アジオ, 1984 「解説」、『山村海村民俗の研究』 名著出版、pp.1—26  
Glazer, B.L.and A.L.Strauss, 1965(1988) 木下康仁訳 『死のアウェアネス理論と看護』 医学書院  
-----, 1967(1996) 後藤・大出・水野訳 『データ対話型理論の発見』 新曜社  
比嘉春潮・大間知篤三・柳田國男・守随一, 1984 『山村海村民俗の研究』 名著出版  
松本三喜夫, 1996 『野の学問』 青弓社  
大間知篤三, 1960 「日本民俗学の調査方法、文献目録、総索引」、『日本民俗学大系』 第13巻、平凡社  
Redfield, R., 1941 *The Folk Culture of Yucatan*, Chicago.  
佐藤郁哉, 2008 『質的データ分析法』 新曜社  
成城大学民俗学研究所, 1986, 1987, 1988 『山村生活 50年その文化変化の研究 昭和59年度調査報告』『同 昭和60年度調査報告』『同 昭和61年度調査報告』 同研究所  
-----, 1990 『昭和期山村の民俗変化』 名著出版  
Strauss, A.L.and J.Corbin, 1998(2004) 操・森岡訳 『質的研究の基礎 第二版』 医学書院  
鶴見太郎, 1998 『柳田國男とその弟子たち』 人文書院  
Weaver, A. and P. Atkinson, 1994 *Microcomputing and Qualitative Data Analysis*, Aldershot  
柳田國男(編) 1975 『山村生活の研究』 国書刊行会(初版1937)  
由谷裕哉., 1997 「質的データ分析へのコンピュータ導入から見た民俗調査」、『加能民俗研究』 28号  
-----, 1999 「質的データ分析として民俗調査を評価する試み」、『小松短期大学論集』 11号  
-----, 2009 「柳田國男とG.J.ラムステット」、『加能民俗研究』 40号

《↓申し訳ありませんが、配付資料最終頁に、由谷の近刊共編著のチラシを添付します！》

●新刊案内●

このたび、『郷土史と近代日本』を刊行いたします。ぜひ一読ください。

# 郷土史と近代日本

由谷裕哉(小松短期大学)・時枝 務(立正大学) 編著

A5判 320頁 予価:本体3000円(税抜5%) ISBN978-4-04-653602-0 C3321

発行:角川学芸出版/発売:角川グループパブリッシング

**【本書の内容】**

「守られるべき伝統」を発見した郷土史家たちが、記念や顕彰行為に積極的に関わってきた歴史を鋭く考察した論文集!

**【目次】**

序章——草莽(そうもう)の学の再構築に向けて 由谷裕哉

●第1部 近世・近代の連続と断絶

第1章 地域を知ることとその時代性——郷土史の目的と担い手に関するスケッチ 澤 博勝

第2章 富士信仰の外聞——近世・近代における評価 大谷正幸

第3章 阿蘇という時空間の設定——神話から郷土誌へ 柏木亨介

第4章 神話から民俗へ——南加賀の一祭祀の中世・近世・近代 向井英明

●第2部 伝統および郷土の発見

第5章 近代国学と郷土史 藤田大誠

第6章 神・天皇・地域——阿波忌部をめぐる歴史認識の展開 長谷川賢二

第7章 「名前」の争いの近代——武蔵国式内社における郷土史叙述の特質 渡部圭一

第8章 顕彰される仏法興隆の聖地——館残翁の加賀大乘寺史研究について 由谷裕哉

第9章 「郷土」へのまなざしの生成 山口正博

第10章 郷土地理研究と農村社会学——鈴木理論の形成過程におけるパトリック・ゲデス 石井清輝

●第3部 近代日本と郷土史家

第11章 実学としての郷土史——今井善一郎の郷土史構想 時枝 務

第12章 郷土の偉人像の構築と郷土史——峨山韶碩と峨山道を事例として 市田雅崇

第13章 近代の偽書『東日流外三郡誌』の生成と郷土史家 藤原 明

第14章 郷土史家の声、民俗学者の耳——「不適格な話者」としての郷土史家 飯倉義之

**【お問い合わせ先】**

113-0033 東京都文京区本郷5-24-5

角川学芸出版 編集担当 竹内祐子

電話03-5803-1587 ファックス03-5803-1609